

「故人を思い返す」

詩篇 90：1－12

November.2.2025

詩篇 90：1－12 (パワポ)

Preface

2000年という歳月をかけて、40人程の人々が神に用いられながら膨大なスケールで書かれたこの分厚い聖書が最初から最後まで一貫して語っている最も深刻なテーマが、人の死です。

何よりも、天地万物をお造りになった神なるお方が最も悲しまれ、最も傷つき、到底じっとしておられることなんかお出来にならない天地を揺るがす事件が、唯一、神の似姿に造られた人の死です。

聖書は、「人は本来、神によって神の似姿に造られた唯一の被造物であり永遠のいのちを生きる存在だったけれども、『神を神とする』という人として最も大事なことを大事にせず、神を忘れたかのように罪人となったために、永遠のいのちを失い、その罪の報酬として死ぬる存在となってしまった」と教えて下さいます。

そして、「その死こそが、人にとって最も根本的で最大の問題であり、人の人生におけるありとあらゆる問題の原因であり、起因する」と語ります。

「私たちの悲しみや私たちの痛みのすべては、この死が問題だ」ということです。

だからでしょうか、毎年見る、先に召された父や母やお爺ちゃんお婆ちゃん、兄弟や我が子の写真、一緒に教会生活をしたキリストにある神の家族の写真ですが、再びこうして見ると、なぜだか毎年同じように寂しさを感じ、やるせない涙が出て来ます。

召天者記念礼拝は、そんな私たちのために、永遠のいのちを生きる天の故郷を用意して下さっている主なる神様を礼拝する特別な時であります。

それと同時に、神のもとに先に召された方々を共に偲びながら、キリストにある復活の希望に慰められる、ある意味、寂しさを超えた喜びを実感させて頂ける尊いひと時でもあります。でもやっぱり人の死は、愛する者たちの死は、寂しさがこみ上げてきます。

近い人たちの死は、亡くなってもなお、私たちの感情や思いに寄り添うかのように関りを持ってきます。

今日の説教題を「故人を思い返す」と致しましたが、先に召された故人を思い直し覚えることは、私たちにとって意義のあることのように思えます。

普段から毎日のように思い出される決して忘れることの出来ない故人もいれ

ば、悲しみや寂しさからは立ち直り、普段はそんなに思い出すことは少なくなった故人もいると思いますが、年に一度の召天者記念礼拝の中であっても、または日常生活の中で故人を思い出すことであっても、故人を覚えることは、私たちに
とって意義深いことのように思います。

Part One

どういう面で意義深いかと言いますと、先に召された方に改めて感謝の思い
が出て来て、故人を愛し直せるということではないでしょうか。

実際に故人を思い出したり、思い巡らしますと、その方の嫌なところだったり、
欠点だったり、傷つけられたことだったりとか思い出されることも当然ながら
あると思いますが、不思議なことに、それと同時に、またはそれ以上に、その方
の痛みだったり、頑張りだったり、優しさだったり、思いやりだったり、努力だ
ったり、自分にしてくれたことだったり、または、その方の人としての弱さや生
きることの辛さや苦しみに同調出来るような思いが湧いて来るようになること
があります。

「人間、誰も完璧な人なんかいないし、み～んな、良いところがあるんだ」と
いうことに、事新たにと言いましょ、今更のように気付かされたりします。

私たち自身が少しずつ年齢を重ね、色々な経験を積み重ねることをもって、先
に召された方について新たに気付かされたり、再発見することが出来るように
なります。

これまで何度もお話させて頂いた私の父のことです。

もし存命であれば今年 99 歳という年齢になりますが、12 年前、87 歳とい
う年齢で召されました

亡くなる半年前に「イエス・キリストを信じる」と告白し、前主任牧師の清野
先生に東京までお越し頂いて、レストランの一室で滴礼による洗礼を受けまし
た。

私が大学 4 年生の頃、「牧師になるために神学校に行きたい」と伝えましたら、
「この親不孝者めが！ キリスト気違いになりやがって！」と激怒した父の姿
からは全く想像出来ない程に穏やかで、物腰柔らかな父の姿がそこにはありま
した。

私が幼い頃は、毎日お酒を飲んで怒る父が大嫌いで、怖くて仕方ありません
でした。

酔っぱらって星一徹ばりのちゃぶ台返しをすることもあったり、その後始末
を、母が泣きながら片付けている姿を見ていた私は、「このくそ親父、死んじま
え！」と小学生の頃から思っていました。

ところが、そんな父が、ある時からピタッとお酒を断ち、一滴も飲まなくなり、
穏やかな姿を見せるようになったのです。

私が牧師になった時には、「お前がやってることは、金じゃ買えない尊いこと

だなあ」と、ボソッとしみじみと喜んでくれているような言葉を掛けてくれたりもしました。

そんな父が亡くなりますと、生前の父の暴れん坊ぶりを思い出すことはほとんどなく、戦前から在日韓国・朝鮮人として嵐のような差別の中を生き抜いた父の痛みだったり、人としての弱さだったり、命を懸け命を削りながら家族を守ってくれた身長153cmの大きな背中だったり、温かい眼差しだったり、ちょっとシャイな豪快な笑い顔だったり、私の母の事を誰よりも恋い慕い大事にし、私の妻のことを会いたくても会えなかった生き別れた実の娘をやっと捜し当てたかのような心持ちで愛してくれたり、どんなことがあっても、どんな失敗をしても、どこまでも私の味方でいたくれたこと等々、いいことばかりがなぜだか思い浮かぶようになりました。

「そりゃ、お酒飲まなきゃ、やってられなかったんだろなあ」と思えてしまう程に、父の生き様に同情出来、愛おしく、また申し訳なく思えて仕方がないのです。

父が生きていた時は、そんな思いが私に芽生えるなんてことは想像だに出来ませんでした。父が亡くなりますと、父のことが愛おしくて、会いたくて仕方がない思いが芽生えました。

ある時、亡くなった父が私の夢に出て来たのですが、嬉しくて、父に走り寄って、「お父さん、会いたかったよ」と、わんわん泣きながら抱きしめていました。

父の欠点や良くなかったところよりも、私たち家族への愛や優しさや頼もしや我慢強さや懐の大きさなどが思い出されて、「凄い人だったんだなあ」と思えてしまうのです。

思いも寄らず、私の中で、「父を愛し直す」ということが起こりました。

皆さんはどうでしょうか。

先に召された方について記憶を掘り起こした時、以前とは違う、新しい良い面に気付かされることがありますでしょうか。

「ああ、そうだった。生前にはあまり気付けなくてごめんなさい。もっとそこんところを心に留め、その痛みや辛さを大切にして上げれば良かったね。今さら、何もしてあげられないけれど、本当にありがとうね」と、改めて故人に感謝し、愛し直すことが、故人を偲ぶ時起こるならば、なんと幸いなことかと思えます。

死んでもなお夫婦になっていくし、死んでもなお親子になっていくし、死んでもなお兄弟になっていくし、死んでもなお親友になっていく。

または、変な話、死んでから夫婦になっていくこともあるし、死んでから親子になっていくこともあるし、死んでから兄弟になっていくこともあり、死んでから親友になっていくこともあるように思います。

しかも、こういう故人を愛し直すという積み重ねは、私たち自身の人間性と言いましょうか、人としての厚みを謙虚で豊かなものにしてくれるように思いま

す。

多少なりとも人に寄り添えるようになり、人からも信頼され、神に喜ばれ、人の役に立てる者へと成長させられていくように思います。

神を愛し、人を愛すということが、人の死を偲ぶことで、増し加えられることがあるように思います。

確かに聖書を見てもそうですが、「もう既にこの地上での生を終え天に召された人のことや、その人の生き方や、またその人の人生を通して語られた神の言葉を思い出し、倣い、従うように」と促すような書き方をしています。

人の死は、私たち人間に、神という存在と、人の愛おしさを思い出させてくれる鍵のような役割をも担っているように思います。

Part Two

また、故人を覚えることの二つ目の意義深さは、自分の死、自らの死という、人として最も厳粛かつ重要な事実を覚えさせられることだと思います。

先程、詩篇 90 篇を読みましたが、10 節で、人のいのちの果かなさについて述べています。

詩篇 90 : 10 (パワポ)

この詩篇の詠い手であるモーセという方は、「人のいのちがいつまでも続くことはなく、振り返れば一瞬であり、また人生のほとんどが労苦とわざわいだ」という厳しい現実をよく知っていたようです。

生まれたその瞬間から誰もが死と直面し、死に向かって生きているという矛盾のような果かなくも厳しい現実を、とこしえの神を見上げることによって悟らされていたのだと思います。

モーセ自身の人生において、先に死んでいった他の多くの人たちと、その人生を目の当たりにしながら、「死に行くいのち」という「いのちなのに死が伴う」という矛盾と果かなさを骨身に染みる程に感じたのでしょう。

1 節から 6 節の御言葉をもう一度読んでみます。

詩篇 90 : 1－6 (パワポ)

すべての人のいのちを司られている天地万物をお造りになられた唯一まことの神を信じていた神の人モーセにとっても、草のようにしおれて、枯れて、消えてしまう人のいのちの果かなさ、人の死は他人事ではなく、自分自身も向き合わなければならない真剣な深刻な課題であり、問題でありました。

実際、家族などの特に近しい人の死は、私たち自身の死という最も厳粛かつ重

要な事実を思い起こさせるものとして、神は私たちに、それを体験させなさいます。

「あなたの愛する人の死をもって、あなた自身の死をどう受け止め、どう理解し、どう取り扱っていくのか」と、神さまは私たちすべての人間に問うておられます。

最初に述べましたように、聖書は、私たちに最も重要で深刻な事実を教えてくださいます。

「本来、人は神のかたちに造られた存在であるがために死を知らない者であったけれども、創造主なる唯一まことの神への人類全体の不従順の罪と不信仰の結果、すべての人に死が臨むようになり、その死から誰も逃れられず、またその死に至るまでの人生は、労苦とわざわいの連続という厳しいものになってしまった」ということです。

では、この現実を前にして、モーセはどのようにしたのでしょうか。

「こんな人生、意味がない。どうせ死ぬんだから」と言って、好き勝手な生き方や虚無的な人生を選んだのでしょうか。

違います。

そのような生き方を、まことの神を信じる彼は選びませんでした。

では、どうしたのでしょうか。

人が死ぬことを、ご自身の最も深い悲しみとなさった神なるお方が、すべての人の永遠の死の身代わりとなるために人の姿をお取りになってこの地に来られた神の実体なるイエス・キリストの十字架の死を、モーセ自身の罪の身代わりとして信じ受け入れ、再び、死んでも生きる永遠のいのちを回復させて頂き、それをはるかに仰ぎ見る生き方を選び取っていきました。

神に喜ばれる生き方、神を信じるという生き方、そして、そんな生き方こそが、人にとって、自分自身にとって、また他者にとっても最も幸いなことであると悟り、その生き方を全うしました。

ただ心からの信仰で。

イエス・キリストの十字架の死が、私の罪の身代わりであるという心からの信仰だけで、一切の罪をお赦し下さる神の愛を信じ、神の眼差しを覚えて、神の御心を我が心として生きることを選び取って行きました。

この地上の歩みを終えた後、直ちに神がご用意下さった天の御国の住まいに召されて行き、神の国で永遠に、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体なる神との平安のうちに生きることに憧れ、待ち望みながら生きることを選び取って行きました。

「地上での残された時間を、見ても満足することがなく、聞いても満ち足りることもなく、所有してもたましいの渇きを潤すことの出来ない風を追うような

空しいことに費やして過ごすのではなく、むしろ、如何にして神さまに喜んで頂けるように生きられるのか」と、考えました。

その思いが、神への祈りとして表れているのが、12節の言葉なんだと思います。

詩篇90：12（パワポ）

「自分の日を数える」とは、自分に残された時間を考えること、つまり、自分の死をきちんと自覚すること、自らも罪人として死ぬ存在であり、いつの日か神の御前に立つその日をが来ることを覚えることを意味します。

いつ死んでも良いように、残された時間を神に喜ばれ、そして、死んだ後、恐れなく神の裁きの座に立ち、永遠のいのちに与ることが出来るようにと、「知恵の心を得させてください」と祈るのです。

Part Three

伝道者の書7章というところに、人の死を覚えることの重要性について書かれています。

伝道者の書7：1－4（パワポ）

人の死を覚えることは、私たちに、本質を、根本を、神の存在を、人への愛を、死ぬるいのちという矛盾を、果かなさを、そして、その果かなさを超えた永遠のいのちへの渴望や希望を思い起こさせてくれます。

死をきちんと意識しないと、つい私たちの生き方は、目先のことしか考えない刹那的で、表面的なものに陥りやすくなってしまうかもしれません。しまうでしょう。

でもそれでは、神に喜ばれず、自分でも本当の意味での聖いまことの喜びも、深い充足感やたましいの潤いも無い空しいものに終わってしまい、瞬く間に時間を浪費し、気が付くと人生の終わりの断崖絶壁まで来ていた、ということになりかねないでしょう。

「そうならないように」と、かつてイエス様が、真剣に真つすぐに人々に話されたことがありました。

ルカの福音書21：33－36（パワポ）

（「その日が」→「永遠の死が」）

「その日が」、つまり、「永遠の死が罨のように、突然あなたがたに臨むことにならないように、よく気をつけなさい」とイエス様仰います。

死を覚えること、神の前にあって死を、神の言葉のうちに私たちの終わりを覚

えること、またそのために祈ることは、私たちを、目先のことしか考えない短絡的な生き方から守ってくれます。

救ってくれます。

ヨーロッパの修道院で、修道士たちが庭や廊下ですれ違う度に、言い交わしてきた言葉があるそうです。

「メメント・モリ」という言葉です。

「メメント・モリ」とはラテン語で、「死を覚えよ」という意味です。

つまり、死を覚えることで、自分に残された命の時間を大切にし、特に、私たちの罪の赦しのために十字架で命を献げ、死より復活された神の御子イエス・キリストと共に、神の御心を求め、御心を知ったならば喜んで従い、愛をもって人に仕え、感謝しながら丁寧に生きることを互いに励まし合ったというのです。

死を覚えることは怖いことだったり、意味のないことだったり、「どうせ死んでしまうんだから」というあきらめの気持ちに浸って感傷的になることなく、まことのいのちに繋がる、本当は、とても積極的な深い意義があるように思います。

Conclusion

ここまで、故人を覚える意義について考えて参りましたが、私たちよりも先に召された近しい故人を思い返すことを通して、私たち自身も自らの死を覚え、地上で残された時間を、ぜひ、神の下さる知恵によって生きる者とされたいと願います。

私たちよりも前に世を去り、神が世に遣わされた救い主神の御子イエス・キリストを信じ歩み、今、天国で、言葉に尽くせない喜び、慰め、平安のうちに、父なる神の御顔を仰いで生きておられる信仰の先達たちを覚えながら、

なお苦勞とわざわいは付きまといますが、ここに集う私たちも、残された人生をイエス・キリストにその手を握られ、神の言葉と愛から絶えず励ましと知恵を頂きつつ、共に歩んで行きたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：詩篇 90：12